

## 中部幾次郎～明石から「朝鮮」へ～

兵庫地理学協会会員 片山俊夫

注：( )内は中部幾次郎の満年齢を示す

### 1. 銅像と石碑が語るもの

#### ・明石公園前の銅像

- ・1928年(S3)明石公園大手門入口に「中部幾次郎翁銅像」を建立(資料①)  
→金属回収で供出→1951年(S26)「中部幾次郎翁銅像」を再建(資料②)

※『中部幾次郎壽像除幕記念帖』(1928年)

壽像除幕協賛会副会長：膳(かしわで)末次郎(資料⑥)、友人代表：木下吉左衛門

- ・同じ年(1928年、S3年)、方魚津(現：韓国蔚山市)に建てられた二つの碑
  - ・小学校校庭に「中部幾次郎氏功績碑」(朝鮮総督の斉藤実が揮毫)(資料③④)
  - ・「防波堤築造記念碑」(方魚津防波堤期成同盟会長：中部幾次郎氏)
- ・中部幾次郎の生きた時代：1866年(慶応2)1月4日～1946年(S21)5月19日  
※中部幾次郎家系図(資料⑤)・中部財閥の企業系統図(資料⑩)

### 2. 「林兼」の誕生とその経営

#### ①明石における鮮魚仲買運搬業

- ・「林兼商店」=林崎の地名・屋号「林屋」+父の兼松の名前
- ・明石近海～五島列島の鮮魚買付→大阪雑喉場へ

※仕込みと運搬、雑喉場生魚問屋との関係

#### ②内国勸業博覧会からの発展

- ・押送り船→1897年(M30)小型蒸気客船「淡路島丸」を曳船に利用(一時的)  
これにより明石～大阪雑喉場間・・・14～15時間→4～5時間に短縮  
※スピード→時間短縮→魚の鮮度→高値販売
- ・1903年(M36){37歳}第5回内国勸業博覧会(大阪)を見学 ※博覧会と近代  
「巡航船」(博覧会会場への交通機関)と水産館に展示の冷蔵庫に注目  
→1905年(M38){39歳}石油発動機付鮮魚運搬船「新生丸」建造(資料⑪参考)  
※綿末商店(膳末次郎)からの資金援助+小杉造船所+清水鉄工所  
※1902年頃小泉國松が石油発動機付鮮魚運搬船「厚生丸」  
→1924年(T13){58歳}日本初のブライン式冷蔵庫を彦島に建設  
※1923年(T23)制定の農商務省「水産冷蔵奨励規則」の  
適用第一号、国から30万円の補助金(建設金100万円余)  
(以後5年間に彦島第一・清津・青森・羅老島・郡山に建造)

### 3. 日本漁業の「朝鮮」進出とその背景

#### ①漁業事情の変化（明治～大正）

- ・市場の変化・・・工業の発展→人口の都市集中→大都市の水産物消費市場の拡大
- ・漁業生産面の変化

沿岸漁業中心の小生産→漁船の動力化・外国技術導入→漁場の拡大

- ・漁業人口の増加→各地（特に瀬戸内海）で漁場紛争多発

→小規模漁民の海外進出要因に

#### ②日清・日露戦争と「朝鮮」漁場・・・「通漁」から「移住」へ

- ・保護奨励策の推移（資料⑦）と朝鮮「通漁」の状況（資料⑧⑨）
- ・日本人移住の著名漁港の分布（資料⑩）

#### ③鮮魚仲買運搬業の発展

- ・雑喉場生魚問屋（資料⑥）の強力な経済的背景+大阪の消費市場

・綿末商店（膳末次郎）→「林兼」（のちの大洋漁業）

・神平商店（鷺池平九郎）→「水産協同組」（「山神組」に改称、

1917年トロール最大手の田村汽船漁業部が出資、「日本水産」に改称）

※「林兼」—明石、「山神組」—沼島

- ・輸送手段の発達=発動機船・汽船・汽車による鮮魚輸送・冷蔵貨車、冷蔵倉庫

### 4. 「林兼商店」から「大洋漁業（株）」へ（・・・社会貢献関係）

#### ①下関から「朝鮮」へ

- ・1904年（M37）{38歳} 「林兼」の本拠地を下関に ※下関の地理的位置
- ・1905年（M38）{39歳} 石油発動機付鮮魚運搬船「新生丸」建造（資料⑪参考）
- ・1907年（M40）{41歳} 初めて「朝鮮」漁場に進出・・・羅老島・方魚津
- ・1909年（M42）{43歳} 「明石型」生魚運搬船を建造（農商務省標準型に採用）
- ・1915年（T4）{49歳} 「朝鮮」漁業の本部を方魚津に。幾次郎、方魚津に移住。

農場経営に着手 ※金海に350町歩、のち1945年までに朝鮮各地に2千数百町歩

※「外邦図」に見る林兼農場（資料⑫⑬）

- ・1916年（T5）{50歳} 朝鮮でサバ大凶漁+コレラ流行 ※年末に林兼は大漁  
〔朝鮮進出の漁業者・運搬業者に大きく影響〕

- ・1917年（T6）{51歳} 一部の漁業を直営に移す

- ・1918年（T7）{52歳} 片手廻しテーブル式巾着網を考案

→第一魚生丸を建造（1920年）・・・サバ漁業に活躍

方魚津尋常高等小学校（校舎と敷地を寄付）

方魚津港防波堤築港費（10万円寄付）

- ・1919年（T8）{53歳} 林兼造船鉄工所を創設

- ・1922年（T11）{56歳} 小型冷蔵運搬船を朝鮮漁場に投入

※大型冷蔵船導入の葛原冷蔵・「ひむろ組」との競争

林兼商店が土佐捕鯨を買収

紺綬褒章を受賞

明石中学校の建設 (15 万円寄付), 明石高等女学校 (5 万円寄付)

- ・ 1923 年 (T12) {57 歳} 明石水産会長に就任  
関東大震災一第 27 新生丸が青森から東京へ、罹災者に鮮魚を安く供給。
- ・ 1924 年 (T13) {58 歳} 日本初のブライン式冷蔵庫を彦島に建設
- ・ 1924 年 (T13) {58 歳} 個人経営から株式会社組織に
- ・ 1925 年 (T14) {59 歳} 方魚津の漁業本拠を下関に。幾次郎、下関に移住。
- ・ 1928 年 (S3) {62 歳} 藍綬褒章を受賞 (銅像・二つの碑建立)

## ②世界の海へ～北洋漁業の挫折と南氷洋捕鯨進出～

- ・ 1927 年 (S2) {61 歳} 初のカニ工船出漁 (→S.7 年まで) [北洋漁業開始]
- ・ 1929 年 (S4) {63 歳} 長府 (現:下関市内) に住宅購入 (現:長府庭園)
- ・ 1930 年 (S5) {64 歳} 下関商工会議所会頭に就任 (昭和 18 年 9 月まで)
- ・ 1932 年 (S7) {66 歳} 母船式サケ・マス漁業開始  
(→S10 太平洋漁業に吸収合併) [北洋漁業から閉め出される]
- ・ 1934 年 (S9) {68 歳} 林兼商店(株)満州支店開設 (軍との関係増加)
- ・ 1935 年 (S 10) {69 歳} 中部謙吉を東京に常駐 (丸ビル 6 F にオフィス)  
※三菱商事との関係・・・のちの鯨油は三菱商事が販売
- ・ 1936 年 (S11) {70 歳} 大洋捕鯨 (株) 設立。  
国産捕鯨母船=日新丸の完成 (川崎造船所) →神戸港から南氷洋へ出漁  
※日新丸船団長=志野徳助の急逝と中部利三郎 ※資料⑭1938 年日新丸
- ・ 1937 年 (S12) {71 歳} 第二日新丸の完成 (川崎造船所)  
(母船・捕鯨船・・・軍に徴用、捕鯨は 1941 年まで)  
※日新丸は S19.5.6 雷撃沈没・第二日新丸は S18.4.17 雷撃、のち廃船 (資料⑮)
- ・ 1939 年 (S14) {73 歳} 明石中学校理科室新築費 (3 万円寄付)  
講堂新築費 (10 万円寄付) (資材不足のため建設延期)
- ・ 1940 年 (S15) {74 歳} 紀元 2600 年奉祝祭典にあたり正六位に叙せられる
- ・ 1941 年 (S16) {75 歳} 釜山高等水産学校 (30 万円寄付)
- ・ 1942 年 (S17) {76 歳} 中部科学研究所を設立 (のち日本鯨類研究所)
- ・ 1943 年 (S18) {77 歳} 統制令により西大洋漁業統制 (株) と社名変更  
※水産統制令と幾次郎の抵抗
- ・ 1945 年 (S20) {79 歳} 12 月 15 日大洋漁業株式会社に社名変更
- ・ 1946 年 (S21) {80 歳} 貴族院議員に勅選  
※捕鯨再開・・・2 月に下関から小笠原近海へ  
※南氷洋捕鯨・・・8 月 6 日許可、11 月 18 日出漁、幾次郎 5 月 19 日死去
- ・ 1949 年 (S24) 大洋漁業本社を東京に移す。球団を下関に結成 (翌年、大洋ホエールズ)

[参考文献]

- ・『中部幾次郎壽像除幕記念帖』(1928年)
- ・明石市教育会編『中部翁略伝』(1941年)
- ・松本文懷鳥『朝鮮の林兼』(1949年12月～1953年10月までの「新大洋」(社内報?)  
連載の文をまとめたもの)(1953年11月)
- ・大洋漁業80年史編纂委員会『大洋漁業80年史』(1960年)
- ・吉田敬一『朝鮮水産開発史』朝水社(1954年)
- ・大佛次郎編著『中部幾次郎』中部幾次郎翁伝記編纂委員会(1958年)
- ・田中均『日本の水産業 大洋漁業』展望社(1959年)
- ・鈴木松夫『中部謙吉』時事通信社(1961年)
- ・みなと新聞社編『冰山点々 中部利三郎氏「魚の思い出」』(1967年)
- ・『資料 大阪水産物流通史』三一書房(1971年)
- ・水産経済新聞社編『追想 中部謙吉』(1978年)
- ・『私の履歴書 昭和の経営者群像7』日本経済新聞社(1992年)  
(中部謙吉の「私の履歴書」あり)
- ・徳山宣也編『年表で綴る大洋漁業の歴史(私家版)』(2001年)
- ・石田善人監修・明石文化財調査団編集『新明石の史跡』あかし芸術文化センター発行(1997年)
- ・長谷川正『マルハの挑戦』ビジネス社(1996年)
- ・中村均『韓国巨文島につぼん村』中公新書(1994年)
- ・酒井亮介『雑喉場魚市場史』成山堂書店(2008年)
- ・高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』岩波新書(2002年)
- ・佐竹敏之『大洋ホエールズ誕生前』文芸社(2009年)
- ・明石ペンクラブ作品集『明石大門31』(2011年)
- ・菊池浩之『日本の地方財閥30家 知られざる経済名門』平凡社新書(2012年)
- ・高乗雲「日本の朝鮮漁業利権収奪と「移住漁村」について」  
アジア経済法科大学アジア研究所『アジア研究所年報』第5号(1992年)
- ・藤永壮「植民地下日本人漁業資本家の存在形態—李瑯家漁場をめぐる朝鮮人漁民との葛藤—」  
朝鮮史研究会編集『朝鮮史研究会論文集』No.27 緑蔭書房(1987年)
- ・窪田和美「日本からの移住漁民にみられる職業倫理—韓国方魚津の場合—」  
龍谷大学社会学部紀要 第18号(2001年)
- ・高 宇「資本制漁業と中央卸売市場の成立(上)(下)—日本水産の場合—」  
立教経済学研究 第56巻第2号(2002年)、第3号(2003年)
- ・吉形士郎編『日生町誌』日生町(1972年)
- ・神谷丹路「韓国歴史漫歩 第17回・18回 羅老島」  
「韓国歴史漫歩 第23回・24回方魚津」  
(韓国文化院監修「月刊韓国文化」1999年8月号・9月号、2000年2月号・3月号)

- ・神谷丹路「近代日本漁民の朝鮮出漁の研究—朝鮮南部の漁業根拠地  
長承浦・羅老島・方魚津を中心に」中央大学大学院 (2014年)
- ・中井 昭『香川県海外出漁史』香川県・香川県海外漁業協力会 (1967年)
- ・戦没した船と海員の資料館編集『戦没船写真集』全日本海員組合 (2001年)  
第二日新丸写真あり
- ・吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』中公新書 (1992年)
- ・小林 茂『外邦図—帝国日本のアジア地図』中公新書 (2011年)
- ・鈴木譲二『日本の朝鮮統治』学術出版会 (2006年)
- ・崔吉城・原田環共編『植民地の朝鮮と台湾』第一書房 (2007年)
- ・金柄徹『家船の民族誌—現代日本に生きる海の民—』東京大学出版会 (2003年)
- ・布野修司・韓三建・朴重信・趙聖民『韓国近代都市景観の形成 日本人移住漁村と鉄道町』  
京都大学学術出版会 (2010年)
- ・宇佐美昇三『蟹工船興亡史』凱風社 (2013年)

[捕鯨関係]

- ・『南氷洋捕鯨実況』大洋捕鯨株式会社 (1937)
- ・竹田繁夫『南氷洋に生きる』いさな書房 (1960年)
- ・大洋漁業南氷洋捕鯨船団の記録を残す会編『捕鯨に生きた』(1997年)
- ・多藤省徳編著『捕鯨の歴史と資料』株式会社水産社 (1985年)
- ・板橋守邦『南氷洋捕鯨史』中公新書 (1987年)
- ・小松正之『日本の鯨食文化』祥伝社新書 (2011年)
- ・小松正之『歴史と文化探訪 日本人とくじら』ごま書房 (2007年)
- ・岸上伸啓編著『捕鯨の文化人類学』成山堂書店 (2012年)
- ・佐藤金勇『聞書き 南氷洋出稼ぎ捕鯨』無明社 (1998年)
- ・渡邊洋之『捕鯨問題の歴史社会学』東信堂 (2006年)
- ・奈須敬二『捕鯨盛衰記』(食の科学選書) 光琳 (1990年)
- ・中園成生『改訂版くじら取りの系譜 概説日本捕鯨史』長崎新聞社 (2001年)
- ・森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会 (1994年)
- ・福本和夫『日本捕鯨史話』法政大学出版 (1960年)
- ・大村秀雄『鯨を追って』岩波新書 (1969年)
- ・熊野太地捕鯨史編纂委員会『熊野の太地 鯨に挑む町』平凡社 (1965年)
- ・岸本充弘『関門鯨産業文化史』海鳥社 (2006年)
- ・岸本充弘『下関から見た福岡・博多の鯨産業文化史』海鳥社 (2011年)
- ・赤瀬川原平セレクション 復刻版『岩波写真文庫 3 南氷洋の捕鯨 (1950年)』岩波書店 (2007年)



①



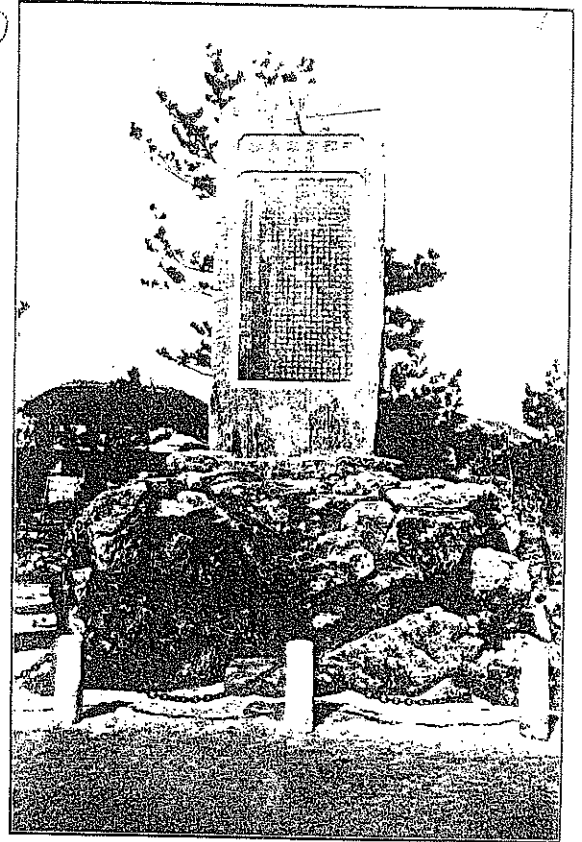
明石公園の中部幾次郎像

②



明石公園大手門入り口に立つ、中部幾次郎像

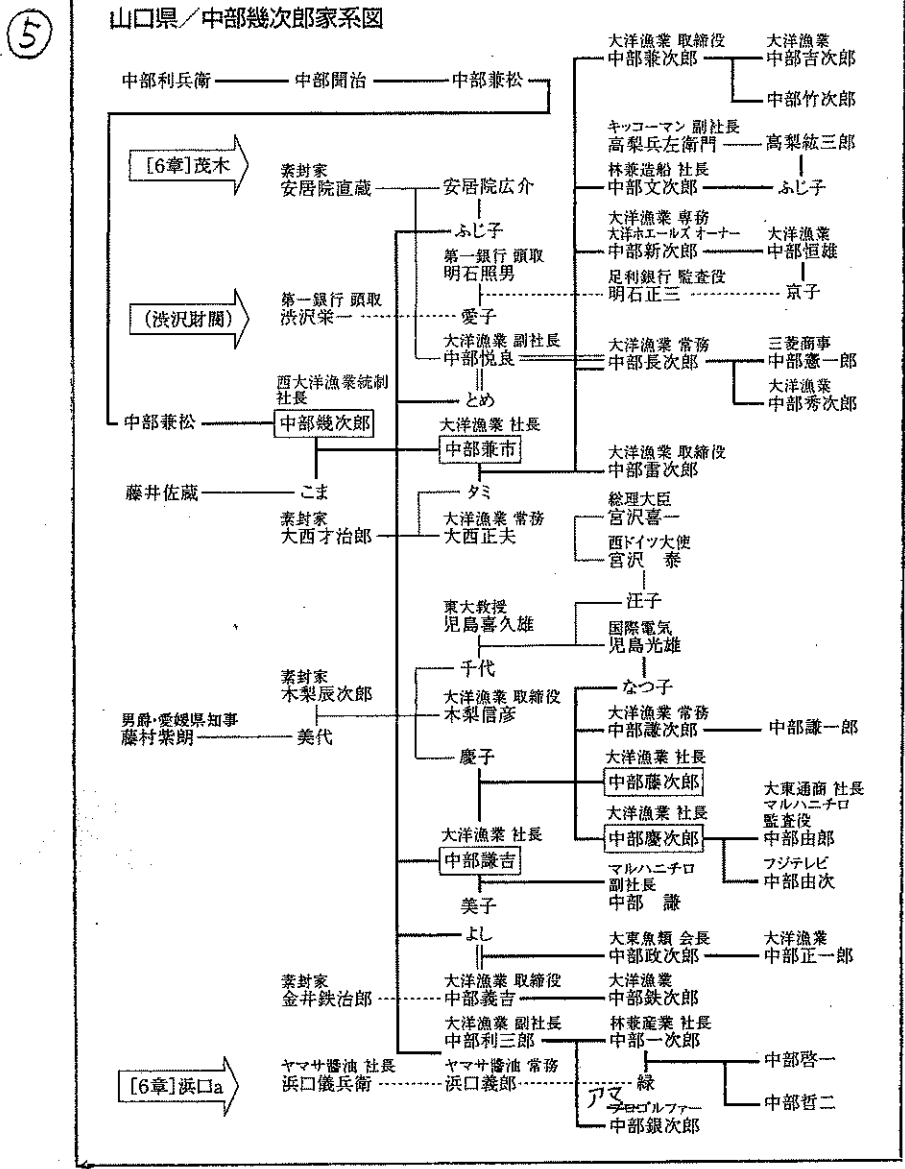
③



碑績功氏郎次幾部中

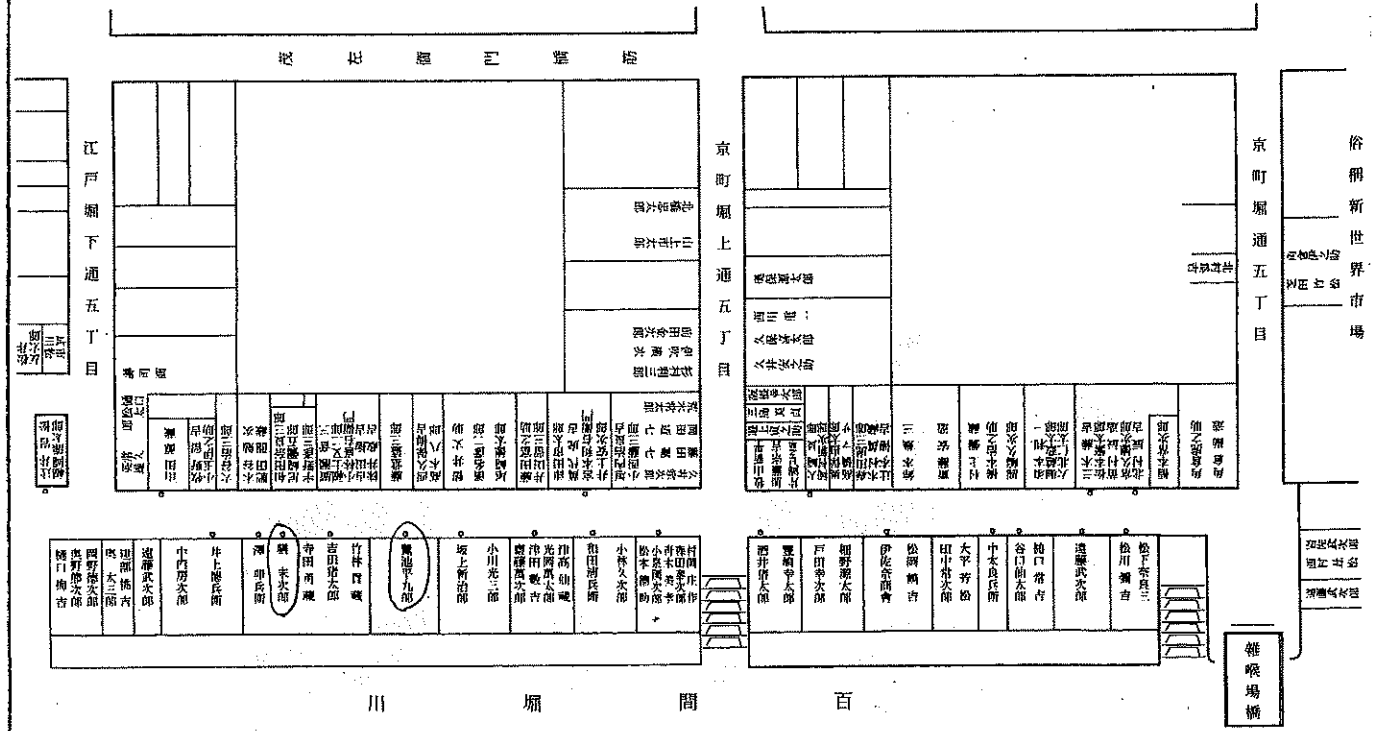
④





6

圖置配舖店場市魚場喉雜



雑喉場魚市場店舗配置図 (大正12年) (『大阪魚市場調査』より) ※ 〇印片山記



7

表 III-1 日本漁民の朝鮮通漁に対する保護奨励策

時期	保護奨励策	内容
1876年	日朝修好条規(日韓修好条規)	釜山を開港場として日本人の居住・通商を認める(韓国開港)
1883年7月	在朝鮮国日本人民通商章程	日本漁民の朝鮮沿海の通漁を正式に認める
1889年12月	日本・朝鮮両国通漁章程	日本漁民の韓国近海の通漁がより円滑になる
1890年	日本朝鮮両国通漁規則	日本漁船が朝鮮近海に本格的に出漁
1897年	遠洋漁業奨励補助法	農相務省水産局長を韓国へ調査派遣
1900年	-	韓海通漁組合を組織(各府県別)・朝鮮海通漁組合連合会を設置
1902年	-	を設け
1904年2月	日韓議定書	20年間の期限で忠清・黄海・平安の3道の通漁ができるようになる
1908年10月	日韓漁業協定	「韓国通漁法」と「漁業法施行細則」(「補助移住漁村」)の基盤となる
1908年11月	韓国通漁法・漁業法施行細則	日本漁民の韓半島の定着と通漁がより有利にできるように支援する装置となる

8

表 3-1 1890-2年の府県別朝鮮通漁状況(隻)

県	1890年	1891年	1892年	計
広島	118	269	270	657
山口	209	125	155	489
長崎	131	45	58	234
大分	76	31	45	152
香川	55	45	40	140
岡山	57	34	38	129
熊本	42	15	10	67
愛媛	14	15	31	60
鹿児島	2	27	14	43
福岡	2	1	11	14
兵庫	7		5	12
鳥根	4	4	3	11
千葉			1	1
徳島			1	1
佐賀			1	1
宮崎	1			1
計	718	611	683	2,012

〔在朝日本人の社会史〕〔木村 1989: 51〕より作成。

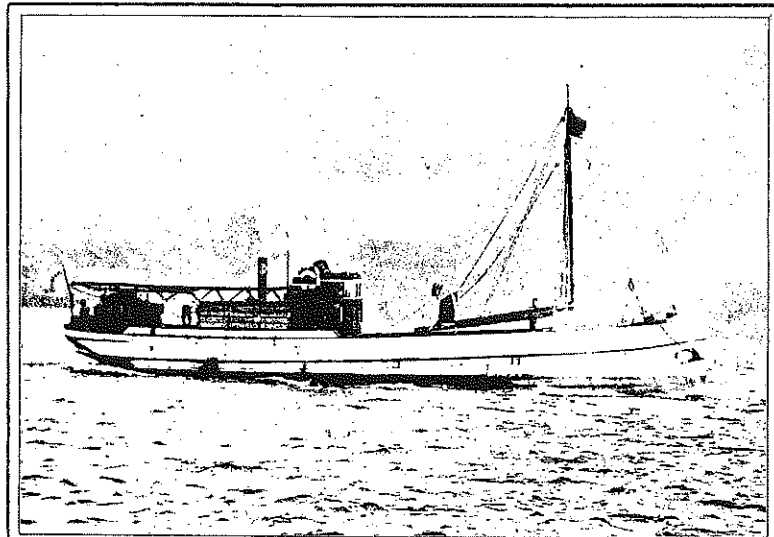
9

表 3-2 日本漁民の朝鮮通漁状況

年度	1894	1895	1896	1897	1904	1905	1906	1907
漁船数	653	823	861	1,305	1,581	2,449	2,748	3,684
漁民数	2,612	3,293	3,444	5,700	6,975	10,853	12,245	16,062

1894-7年 「朝鮮開港以後に於ける日本漁民の朝鮮近海漁業の展開」〔金 1994: 124〕より作成。

1904-7年 「広島県水産会報」(1909)より作成。



九生新 第一 船艇運魚鮮

10

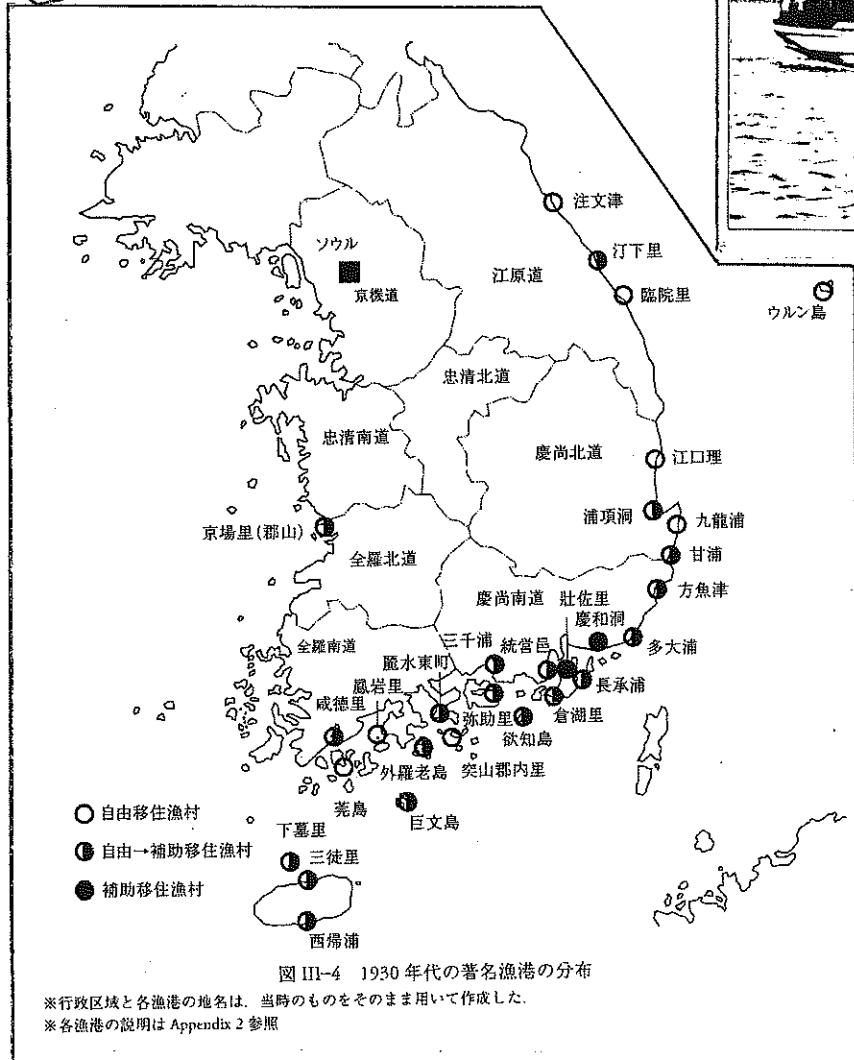
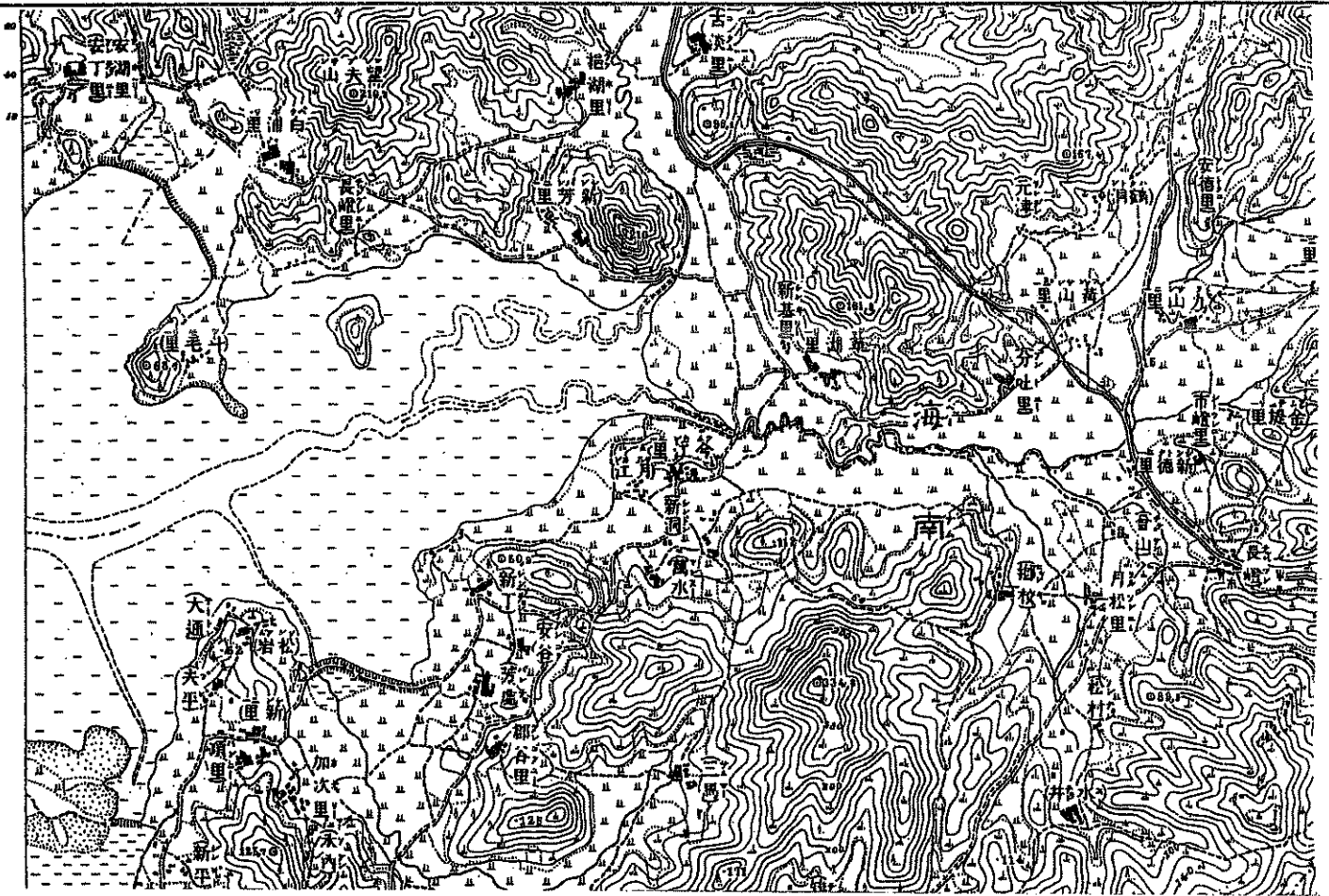


図 III-4 1930年代の著名漁港の分布

※行政区画と各漁港の地名は、当時のものをそのまま用いて作成した。  
※各漁港の説明は Appendix 2 参照

11

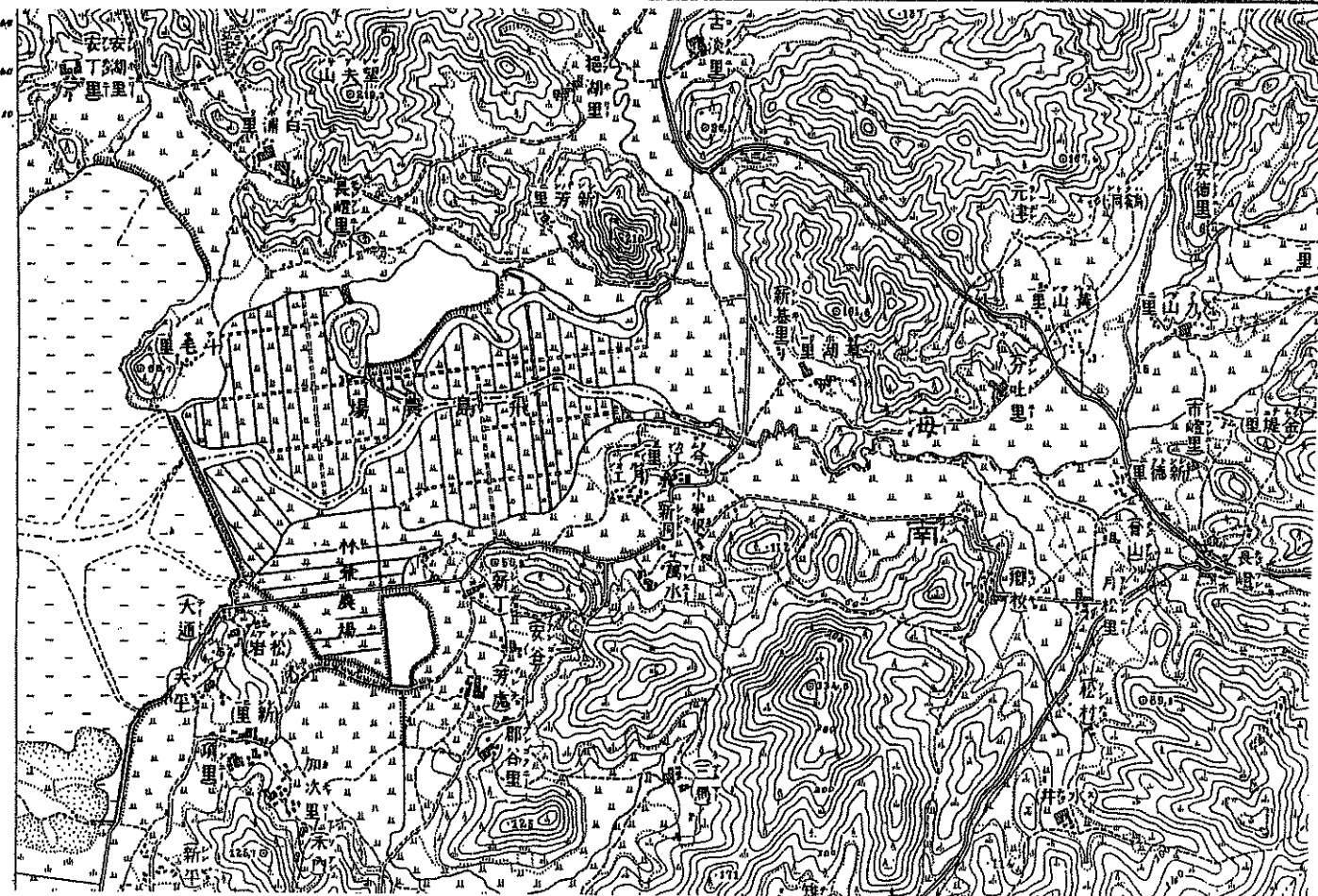
② 『朝鮮半島五万分の一地図集成』 学生社より 「梨津」 図幅 (大正六年測図)



大正六年測圖同七年製版

大正七年六月二十一

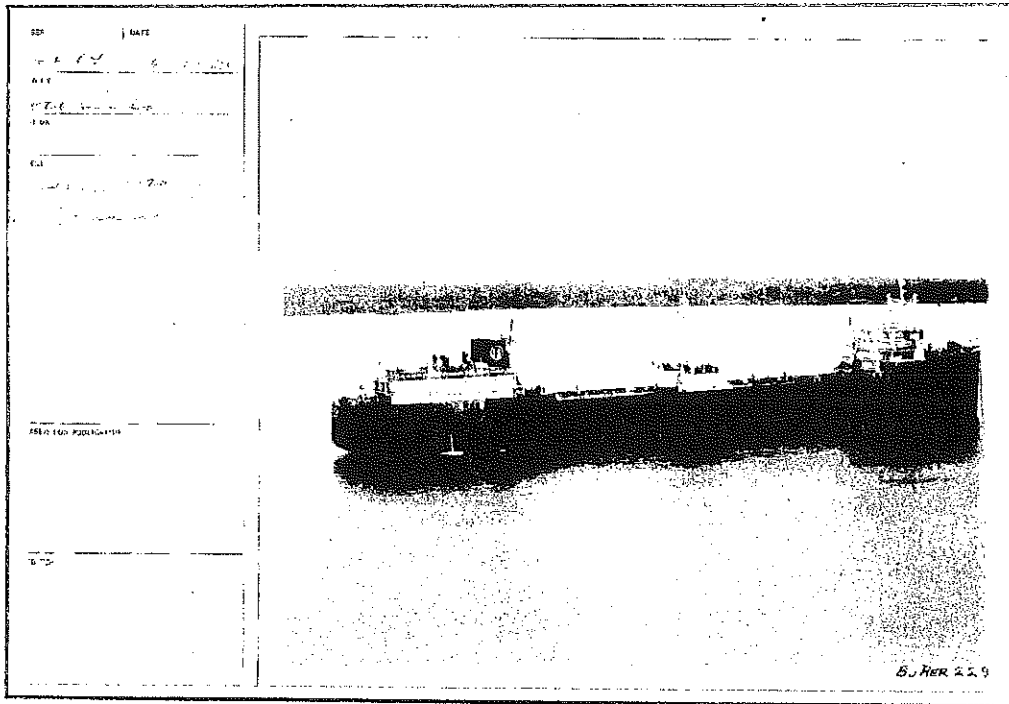
⑬ 世界分布図センター (岐阜県図書館) 所蔵「外邦図」より 「梨津」 図幅 (大正六年測図昭和十年第一回修正測図)



昭和十年第一回修正測圖

昭和十四年八月二十五

14 日新丸 (1938年6月8日撮影)



15

900

八三二	馬公	サンゴク	六連	基隆
三三七	徳山	徳山	六連	基隆
三九	徳山	六連	基隆	基隆
三一	徳山	六連	基隆	基隆
三一	徳山	六連	基隆	基隆
三一	徳山	六連	基隆	基隆
三一	徳山	六連	基隆	基隆
三一	徳山	六連	基隆	基隆
三一	徳山	六連	基隆	基隆

馬公  
徳山  
六連  
基隆

馬公 徳山 六連 基隆

第二日新丸

662

一月目	所	横須賀	横須賀
二月目	所	横須賀	横須賀
三月目	所	横須賀	横須賀
四月目	所	横須賀	横須賀
五月目	所	横須賀	横須賀
六月目	所	横須賀	横須賀
七月目	所	横須賀	横須賀
八月目	所	横須賀	横須賀
九月目	所	横須賀	横須賀
十月目	所	横須賀	横須賀
十一月目	所	横須賀	横須賀
十二月目	所	横須賀	横須賀

大東亞戦争徴備船新九行動概見表  
横須賀地方海軍運輸部長海軍

甲船一四九五三号  
人負一八九名  
輸送

6631

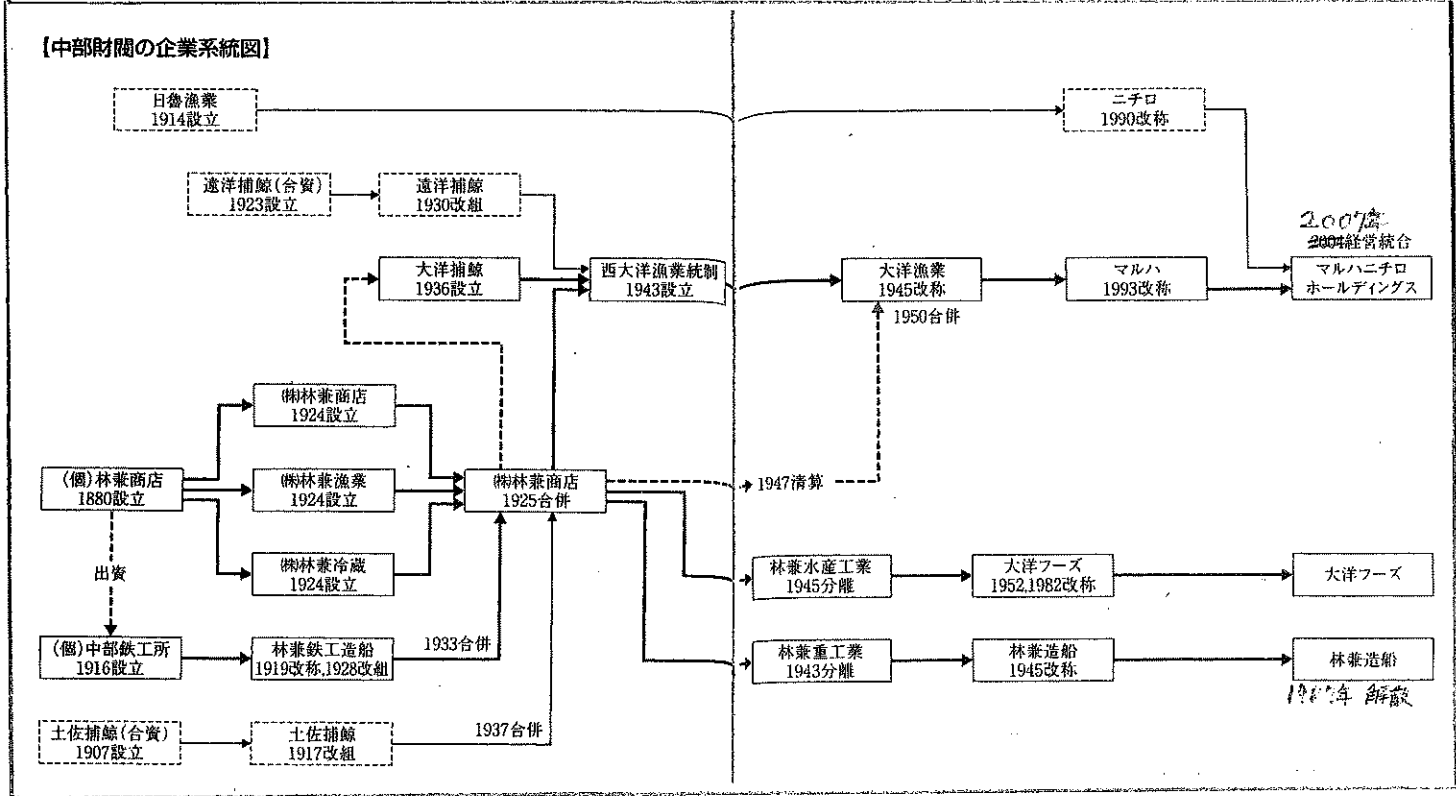
防衛庁防衛研究所図書館

大東亞戦争徴備船舶行動概見表甲(二)

32

東亜海軍輸送船隻 (船舶設備表)

船名	船種	噸位	搭載人員	搭載貨物	備考
丸	輸送船	1000	150	5000	
丸	輸送船	1000	150	5000	
丸	輸送船	1000	150	5000	
丸	輸送船	1000	150	5000	
丸	輸送船	1000	150	5000	



※ マルハニチロホールディングス 経営統合 2004年→2007年に訂正(片山)  
 ※ 林兼造船 - 1987年12月解散(片山追加)

〔資料出所〕

資料① 大洋漁業80年史編纂委員会『大洋漁業80年史』(1960年)  
 資料② 明石ペンクラブ作品集『明石大門81』(2001年)  
 資料③ 明石教育会『中部翁略伝』(1941年)  
 資料④ 個人蔵、撮影年月日不明  
 資料⑤⑥ 菊池浩之『日本の地方財閥30家』平凡社新書(2012年)  
 資料⑥ 酒井亮介『雑喉場魚市場史』成山堂書店(2008年)  
 資料⑦⑩  
 布野修司ほか『韓国近代都市景観の形成 日本人移住漁村と鉄道町』京都大学学術出版会(2010年)  
 資料⑧⑨ 金柄徹『家船の民族誌-現代日本に生きる海の民』東京大学出版会(2003年)  
 資料⑪ 『中部幾次郎氏 壽像除幕式記念帖』(1928年)  
 資料⑫⑬外邦図 ⑫・・・『朝鮮半島五万分の一地図集成』学生社より  
 ⑬・・・世界分布図センター(岐阜県図書館)所蔵外邦図より  
 資料⑭ 「戦没した船と海員の資料館」(神戸市)所蔵データより。  
 元は日本財団平成19年度事業米国国立公文書館入手写真  
 資料⑮ 国立公文書館アジア歴史資料センターより